

4	春日井	高森台小学校	カニエ マイ 氏名 蟹江 麻衣
---	-----	--------	--------------------

分科会番号	2	分科会名	外国語教育
-------	---	------	-------

自信をもって自らの思いを表現する楽しさを実感し、 主体的に学びに向かう児童の育成

～児童の興味・関心に基づいた単元構想と外国語科独自の学習サイクルの構築を通して～

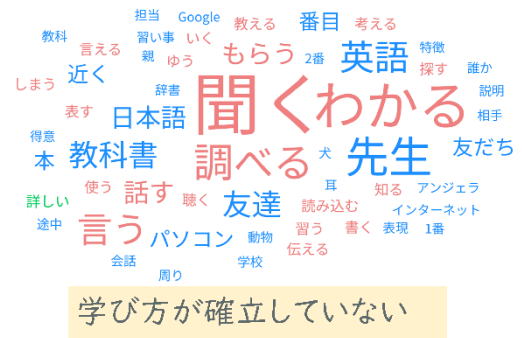
1 主題設定の理由

現代社会は、生成 AI の飛躍的な進化に代表されるように急速に変化し、多様化している。予測困難な時代において、異なる文化や価値観をもつ人々と共に生き、互いに理解し合い、尊重し合う力を育むことは不可欠である。学習指導要領では、外国語科の目標を「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す」と定めている。次期学習指導要領の改訂に向けた議論（2025）では、外国語科の新たな「見方・考え方」として「多様な他者との相互理解を図ること」が明示され「他者との相互理解」の実現が一層重視されることになる。本研究では、児童の興味・関心に基づいた単元構想のもと、個別最適な学びの場の設定と他者との豊かな関わりを通して、自律的に学習する力を育み、主体的に学びに向かう児童の育成を目指し、本研究の主題を設定した。

2 研究の目標

（1）児童の実態

本研究では、第5学年（男子20名、女子19名）を対象に実践を行った。男女の仲はよいが学習に対して受け身な様子で、自ら課題を探究することが苦手である。事前アンケートでは「英語が好き」な児童が74.3%にのぼる一方「思いが言える」児童は56.4%に留まった。また、伝えたいことが言えないときに大多数の児童が「先生に聞く」等と回答し、自律的な学習すなわち「学び方」の確立が未成熟であることが分かった（資料1）。



【資料1】学び方の確立の未成熟さ

（2）目指す児童像

自信をもって自らの思いを表現する楽しさを実感し、主体的に学びに向かう児童

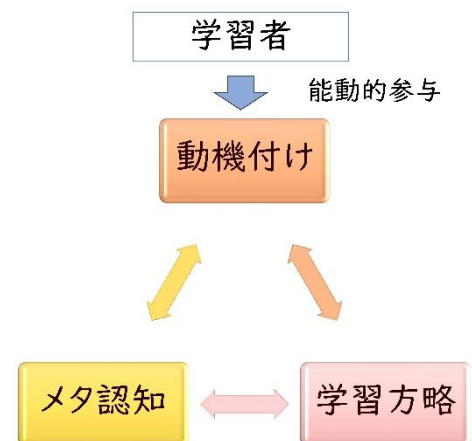
（3）研究の目標

河村（2019）によると、自律的学習は「自己調整学習（self-regulated learning）」と呼ばれ、学習者が「動機付け」「学習方略」「メタ認知」を取り入れ、行動に積極的に関与する学習である（資料2）。本実践では、児童の興味・関心に基づいた単元構想のもと、外国語科における学習サイクルの構築を図り、個別最適な学びや協働的な学びの場を設定し、主体的に学びに向かう児童の育成を目指す。

3 研究の仮説と研究構想図

（1）研究の仮説

仮説① 児童の興味・関心に基づいた単元構想のもと、外国語科独自の学習サイクルを構築することで、児童のメタ認

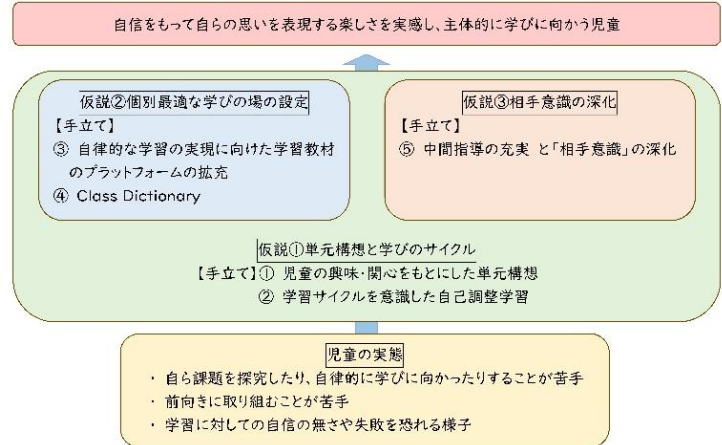


【資料2】自己調整学習

知が育まれ、自己調整力が身に付くであろう。

仮説② 教材や展開を工夫し、児童の理解度に応じた個別最適な学びの場を設定することで、自律的な学習が可能となり、英語の着実な習得を図り、児童が自信をもって自らの思いを表現することにつながるであろう。

仮説③ 児童の見方・考え方を養うことを目指し、単なる知識獲得に留まらず相手意識をもってコミュニケーションを行わせることで、互いに豊かに関わり合うことの楽しさを味わわせる。このことにより、学びたいという思いの醸成につながるであろう。



【資料3】研究構想図

(2) 仮説に対する手だて

仮説①	ア	手だて1	児童の興味・関心をもとにした単元構想
	イ	手だて2	学習サイクルを意識した自己調整学習
仮説②	ア	手だて3	自律的な学習の実現に向けた学習教材のプラットフォームの拡充
	イ	手だて4	「Class Dictionary」
仮説③		手だて5	中間指導の充実と「相手意識」の深化

(3) 仮説の検証方法

仮説が適切であったかを「個別学び&振り返りシート」、アンケート、抽出児童A・B 2名と学年全体の児童の変容をとらえ、目指す児童像に迫ることができたか検証していく。

抽出児童A	学習に前向き。パフォーマンス課題に向けて、伝えたい思いを詳しく考えて準備をすることができるが、相手意識が低く、一方的に話す場面が見られる。
抽出児童B	事前アンケートに「外国語が好き」と回答。しかし「自分の言いたいことは言えない」と回答。どうやって言えばよいか分からないと黙ってしまう場面がある。

(4) 研究構想図

研究を行うにあたり、研究構想図を設定した（資料3）。

4 研究の実際と考察

(1) 仮説①に対する実践と考察

ア 手だて1 児童の興味・関心をもとにした単元構想

児童の興味・関心を基軸にした単元構想をもとに、パフォーマンス課題を設定した。例えば Unit 5では「オリジナル春日井市」の道案内や紹介をすると設定した（資料4）。実際の建物や「my house」の画像を取り入れたことにより実生活に根差した創造的な課題となり、児童に「紹介したい」という強い願いが芽生え、自ら単語を調べたり、練習に励んだりする姿が見られた。



【資料4】児童Aの発表スライド

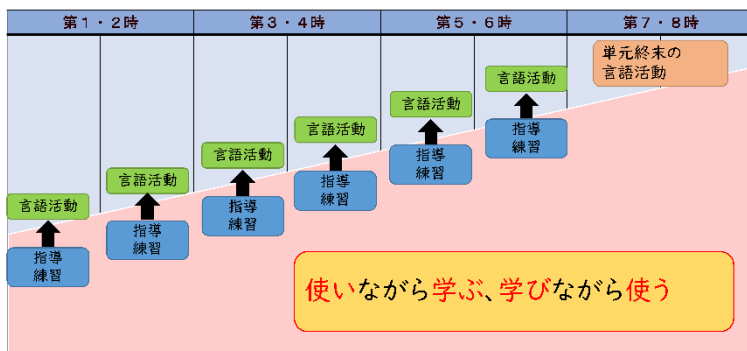
イ **手だて2** 学習サイクルを意識した自己調整学習

学習状況の把握と集約が可能な独自の「個別学び&振り返りシート」を Google スプレッドシートで作成した。児童が学習サイクルを自然に意識して自己調整を行うような形式にした。学習展開を「見通す」「実行する」「振り返る」という大きく3つの段階に分けた（資料5）。

(イ) 実行する							
児童名		【録 友達と】挑戦！紹介して深くめぐる			Unit7 Welcome to Japan!		取り組みリスト
1. 単元目標		■ デジタル教科書			Class Dictionary		*学習計画をしよう*
17	単元を貫く課題	個人目標	☐ Sounds & Letters(p82-83) ☐ Chants ☐ J2 Song ☐ ユビキタス Unit7 ☐ Words (動作 p.22) ☐ Words(季節 p.19) ☐ Words (感情 p.33) ☐ J2デジタル辞書		New! 「行ってみてね」 Where・Why (アンジェラ先生のお手本) What (アンジェラ先生のお手本) 「僕」 ☐ Unit Goal 果 ☒ 専科本Phrases 専 ☒ Listen & Think お手本 ☐ Listen & Think ☐ Let's try!		Hop1 新しい表現・単語を知る Step1 単語をマスターする Step2 基本文をマスターする Step3 自分だけの考えをもつ Step4 自分の考えを練習する Step5 よくわかる相手になりやすく深める Step6 チェックテストを深める Jump1 パフォーマンス練習に挑戦！
2. 本時の 学習の 振り返り		学習計画	本時の個人目標	振り返り	今日の学習で、分かったことや、これから学習や生活にどう活かしていくか 振り返りましょう。 ○、よかったです △、できなかった 文字数		
6	01/27	◎Enjoy Communication もっと日本のよいところを伝えて、日本が楽しいと思ってもらえるように、日本の素数などころをくわしく紹介しよう。	Step4 自分の考え	今回の授業では相手は相手と自分の行きたい順について詳しく知ってもらったけれど、今日は「内容を深くする」ということを汎出し、もっと相手に魅力が100%伝えられるようにしたいです。	今回の授業では汎出友達と交流しました。友達が発表しているときには、相手が言ったことをもう一度言ったり、汎出の相補をしりました。自分がされて嬉しい反応は汎出相手にすることができました。自分が発表するときには、ゆっくりメモをできるだけ見ながら発表することができました。今まで僕が繰り返した試行錯誤の成果が出て内容を深くしたり相補の種類を増やしてより会話を弾ませることができました。次のパフォーマンステストに向けて、まだちょっと間違ったりしてしまう事があるので、完璧にできるように練習していきたいです。	249	
(ア) 見通す					(ウ) 振り返る		

【資料 5】「個別学び&振り返りシート」

第5時～第6時をパフォーマンス課題に向けて児童が伝えたい表現を各自で探究する時間とし、児童の学び方の確立を図った。高橋(2022)を参考に「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という学習の流れをパターン化して、学習サイクルの構築を目指した。しかし、外国語で話すことへの自信のなさから児童がリスニングばかり



【資料 6】バックワードデザインによる単元構成

繰り返したり、日本語で話す内容を考えることばかりに終始したりする姿が見られ、探究を基盤とした学習サイクルだけでは外国語科においては不十分だということが分かった。

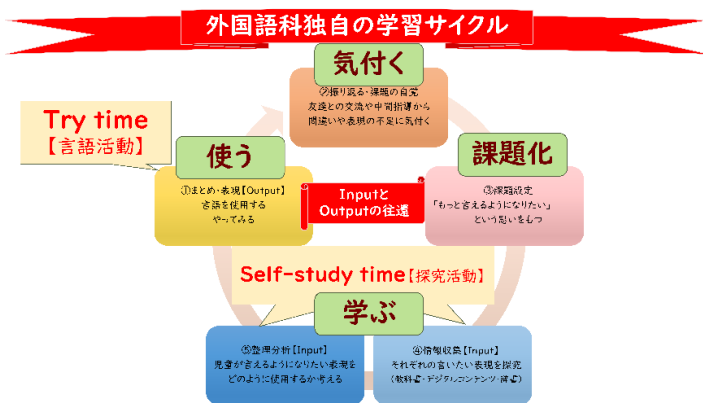
小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック（2017）では、バックワードデザインによる単元構成を提唱している。パフォーマンス活動までの学習活動においても、細かいステップを踏みながら段階的にゴールへ向かう構成となっている。学習指導要領の目標に「言語活動を通して」と明記されている通り、外国語の習得には「使いながら学ぶ、学びながら使う」という循環が不可欠である（資料6）。

The diagram illustrates the 'Foreign Language Subject Independent Learning Cycle'. It consists of four main stages arranged in a circle, connected by arrows indicating a continuous loop:

- ① Try time 【言語活動】** (Try time [Language Activity]): The starting point of the cycle.
- ② 使う** (Use): The stage where the language is actively used. Below this box, it says '①まとめ・表現【Output】' (① Summary/Expression [Output]).
- ③ 課題化** (Problem Solving): The stage where the activity is turned into a task. Below this box, it says '③課題設定' (③ Task Setting).
- ④ 気付く** (Realization): The final stage where the learner gains insight. Below this box, it says '④振り返る・確認の機会 友達との交流や仲間評から 間違いや表現の不足に気付く' (④ Reflect/Confirm opportunity: Gain insight into mistakes or lack of expression from communication with friends or peer reviews).

A red banner at the top of the diagram reads '外国語科独自の学習サイクル' (Independent Learning Cycle of the Foreign Language Subject).

そこで、従来の学習サイクルに「Try time」という言語を活用する場面を意図的に設定した。実際に言語を使うことで、間違いや表現の不足に気付かせ、児童が自らの課題を自覚できるようにした。その気付きから、情報収集や整理・分析といった探究のプロセスを行わせるために「Try time」の後には



【資料 7】 外国語科独自の学習サイクル

「Self-study time」という探究の時間を設けて「Try time」で得た気づきをもとに自分の考えをよ

り深めたり、発話の未熟な部分の習得に向けて練習したりするようにさせた。このことにより「使う」と「学ぶ」を繰り返し行うプロセスを従来の学習サイクルに取り入れることができた(資料7)。

活動序盤では、自信をもって思いを伝えられない児童も「Try time」と「Self-study time」を繰り返すことにより、徐々に自信をもって思いを伝えられるようになった。また、単元を重ねていくにつれて、児童に学び方が確立し、自力で学習を進められる学習者が徐々に増えた。Input と Output の往還を取り入れた外国語科独自の学習サイクルの構築ができた。

児童の主體的に学びに向かう力を育むために、メタ認知的方略を身に付けさせることは欠かせないと考えた。そこで、振り返りを積極的に行うことにした。ところが、1学期初めに振り返りを書かせようとしたところ「外国語の振り返りの書き方が分からない」という声が児童より多く上がった。5年生は教科として外国語の学習を初めて行う段階であり、児童の学び方が確立していないと考えた。そこで、木村(2024)を参考にし、成果と課題に加え、理由を書くように指導した。また「伝えたいけど伝え方が分からない」という困り感も書くように指導し、つまずきの把握に努めた。学び方が定着するにつれて、振り返りをスムーズに書く児童が徐々に増えた。また、感想に留まらず、児童自身が設定した本時の目当てに言及して振り返る児童も現れ始めた(資料8)。

今回は主に「内容」について詳しく考えたので、今回は会話が弾むように沢山のあいづちをいれたり、聞き手から質問して会話が弾むようにしたいです。

今回は「会話が弾むように」を目当てで取り組みました。その目当ては大成功でした。その理由はメモにも書いてなくてもその場で相手に質問して見たりとか、あいづちを沢山の種類を言ったりすることができたため会話が弾みました。

そして今回特に良かったのは「聞き手からも自分の意見を言えた」ことです。こうすることによって相手が話しやすくなるし、相手が自然と笑顔になっていたためです。

次回今回良かった点を活かし、それプラスもっと今回あまりできなかったりアクションもたくさんいれたいです。このように試行錯誤を繰り返して、笑顔あふれる最高のパフォーマンステストにできるようにしたいです。

抽出児童Aの振り返り

目当て
学習を自分事にする
【メタ認知の育成】

振り返り
目当てに言及する
・実際の取り組み
・分かったこと
【メタ認知の育成】

成果
上手くできたこと
+理由

課題
上手くできなかったこと
+理由

【資料8】目当てに言及した振り返り

(2) 仮説②に対する実践と考察

ア 手だて3 自律的な学習の実現に向けた学習教材のプラットフォームの拡充

(ア) 学び方の段階的な指導

1学期は自律的な学習の実現を目指し、基本的な外国語の学習方法を丁寧に指導した。2学期からは自律的な学習の実現を目指した。

「Vision」という、ルーブリックや学び方、学習サイクル等を掲載した学習の手引きを Google スライドで作成した(資料9)。

(イ) 学習教材のプラットフォームの拡充

学習方法の定着とともに、児童が自分に適した教材を選択できることが大切だと考え、学習環境の整備を行った。「個別学び&振り返りシート」を活用し、学習教材のプラットフォームの拠点を作成した(資料10)。学習展開に応じて必要な教材へ即座にアクセスできるシームレスな学習環境を構築した。

学習の流れ			
活動	本時の流れ		ポイント
課題提示	Lesson5 Try① 日本の季節などについて ・日本の食で どう伝える？	Lesson6 Try②もっとくわしく！ 日本の季節などについて 伝えよう！ 尋ねよう！ ・伝えたり、相手から聞き返ったりしよう	Lesson7 Try③ 世界と繋がろう！ ・Over the horizon ・友達と最終確認
情報収集	【Self-study】どうやって伝える？調べてみよう！		
分析・整理・思考	インプット ・人々 ・英語をマスター(ピクチャー・デジタル・動画・辞書) ・フレーズをマスター (デジタル辞書・教科書) ・自分の考えをもつ 友達と ・例文を見せよう ・アドバイスをもつ(伝えたい思いをより表現するには?) ・伝え方 女伝える内容 女保める 女ほめほめ 先生と ・アドバイスをもつ・質問する アウトプット ・シャドーイング ・自分の伝えたい言葉や文を繰り返し発話練習する ・スライドの動画に添って発話 発表を聞いてもらう ・やり取りしてみる ・選りばいエピソードを伝える ・質問し合う ・Check! 先生テストに挑戦!		インプットとアウトプットを繰り返そう ↓ ①何度も発話 自分の発話 発見 ③練習 ↓ たくさん話すのが 上達のカギ!
まとめ・表現	【Try①】 授業始め 【Try②】 【Try③】		
振り返り	①取り戻したこと、わかったこと、気が付いたこと ②次に生かしたいこと、取り組みたいこと + 理由 / 伝え方の分からない表現		

【資料9】学習サイクルを取り入れた授業展開

Unit7 Welcome to Japan!			
デジタル教科書		Class Dictionary	
☐ Sounds & Letters(p82-83)	「完成！」	New! 「行ってみてね」 Where・Why (アンジェラ先生のお手本) What (アンジェラ先生のお手本) 「推し」	
☐ Chants	○パッチ		
☐ Song	○パッチ		
☐ キュビナ Unit7	○パッチ	☐ Unit Goal	①「学習」 ②「学習」 ③「学習」
☐ Words (動作 p.22)	○パッチ	☐ 基本 Phrases	①「学習」 ②「学習」 ③「学習」
☐ Words (季節 p.19)	○パッチ	☒ ① Watch & Think お手本	①「学習」 ②「学習」 ③「学習」
☐ Words (感情 p.33)	「完成！」	☐ ② Listen & Think	①「学習」 ②「学習」 ③「学習」
☐ デジタル辞書	○パッチ	☐ ③ Let's try!	①「学習」 ②「学習」 ③「学習」

【資料10】学習教材のプラットフォームの拠点

(ウ) 外国語科における学習サイクルの中での個別最適な学びの場の設定

2学期中盤の児童に学習方法が定着し始めた段階で、各単元の第5時～第6時を探究の時間とし、個別最適な学びの場を設定した。児童はパフォーマンス課題に向け、自らの興味・関心に基づき伝える内容を深めたり、学習方法を選択して発話練習したりするようになった。個人で探究したり、ペアやグループで協働して学んだりする等、学習形態も児童に選択させて取り組ませた。学習環境を整備したことにより、個々の学習スタイルに応じた選択肢が確保され、多様な学び方を児童に定着させることができた。自らの学びを自己決定させる経験の積み重ねにより、自律的に学習する力を育むことができた（資料11）。個別最適な学びの場の設定を通じて、英語を着実に習得できたことが、児童の大きな自信となり、自らの思いを豊かに表現する姿へとつながった。



【資料11】自律的に学習する児童

イ 手だて4 「Class Dictionary」

フィードバックの方法として Google サイトを活用して独自の「Class Dictionary」を作成した。ALTの口元が見える動画と把握した児童の言いたい表現やつまずき、言い換え等を共有した（資料12）。これにより児童の不安を軽減し、自信をもって自らの思いを表現することへとつながった。

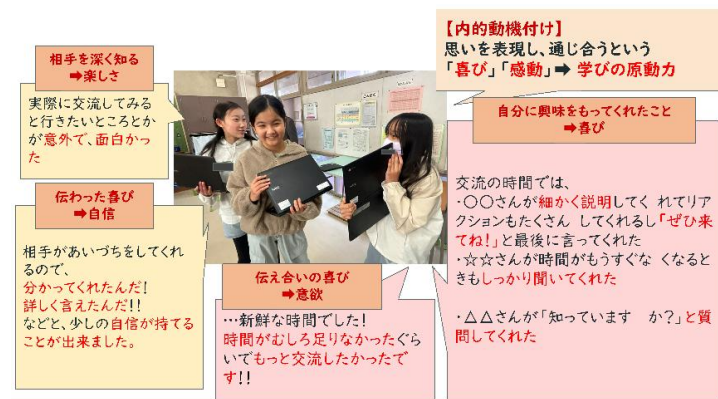


【資料12】Class Dictionary

(3) 仮説③に対する実践と考察

手だて5 中間指導の充実と「相手意識」の深化

自律的な学習が定着し、学びが深まる一方で、翻訳機能を頼ったり、正しく言うことばかりを気にして定型的なやり取りに陥ってしまったりするという課題が見えてきた。やり取りの本質は「互いに思いを伝え合うこと」であると伝えた。中間指導では相手への理解を深める質問をする等「相手意識」をもつ姿を積極的に価値付けた。これにより、即興的にやり取りをする姿が増え、思いがこもった実のあるコミュニケーションが実現した。「通じ合い」そのものに喜びを感じる言葉が振り返りに現れ、自発的な「学びたい」という思いの原動力となった（資料13）。



【資料13】「通じ合い」の喜びの言葉が現れた振り返り

5 研究の成果と課題

(1) 仮説①の検証：メタ認知が育まれたことによる自己調整力の高まり

事後アンケートでは「個別学び&振り返りシート」の活用により、児童自身が「見通す」「実行する」「振り返る」という学習展開を意識することができた。2学期末には、ほとんどの児童が自分の進捗に合わせためあてを立て、学習活動に取り組むことができていた。継続することでメタ認知の育成につながり、児童の自己調整力を高めることが期待できる。

(2) 仮説②の検証：自律的な学習による自信をもって自らの思いを表現する児童の育成

事後アンケートでは、大半の児童が具体的な学習方法を記述することができ、自分なりの学習方法で取り組むことができた実感していることが分かった。個別最適な学びの場を設定したことで、学び方が確立し、自律的な学習が実現したことが分かった(資料 14)。児童の進捗に応じた個別最適な学びを実現したことにより、学習内容の着実な習得が可能となった。その結果、自信をもって自らの思いを表現することにつながったと考えられる。



学び方が確立

【資料 14】学び方の確立



(3) 仮説③の検証：「通じ合い」による主体性の変容

事後アンケートから、ほとんどの児童が「相手意識」をもって取り組むことができた実感していることが分かった。「通じ合い」の楽しさを実感する言葉が増えるにつれ、学びたいという思いの醸成につながっていった。

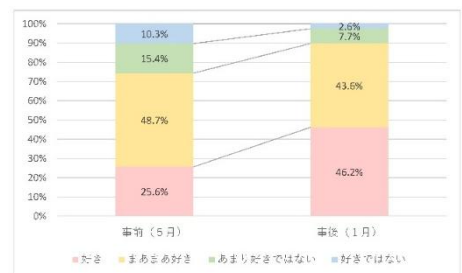
(4) 事後アンケートの検証

事後アンケートの結果「興味・関心のあることを伝えられた」児童が 82.1%に達した(資料 15)。「自分の思いを言える」と 79.5%の児童が回答した(資料 16)。「英語が好き」と 89.8%の児童が回答し、いずれも数値が上昇した(資料 17)。抽出児童Aは、相手に合わせてより実のあるやり取りをするようになり、関わりの豊かさを実感したことで学びたいという意欲を高めたことが分かった(資料 18)。抽出児童Bは、具体的な学び方の記述が増え、自律的な学習ができるようになった。事後アンケートから「英語で自分の言いたいことが言えるか」の問いに「まあまあ言える」と回答し、自己効力感が高まったことが分かった(資料 19)。

【資料 15】興味や関心のあることを英語で伝えられたか

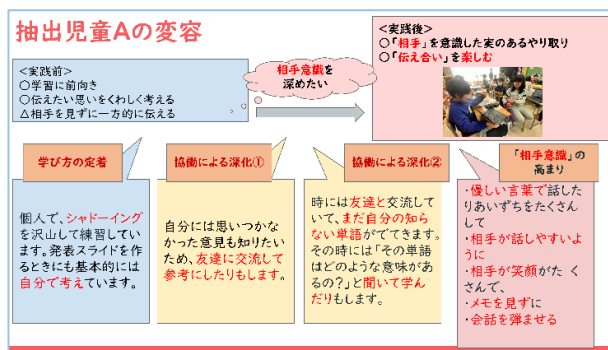


【資料 16】自分の言いたいことや思いを英語で言えるか

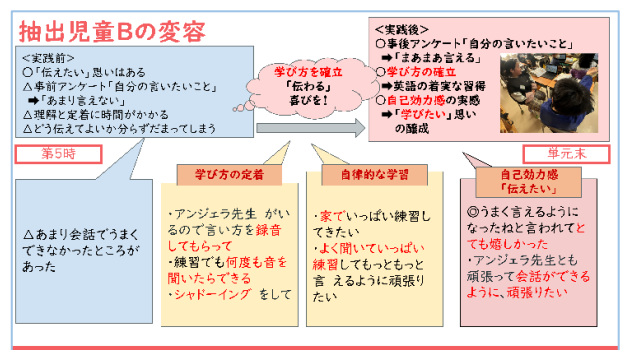


【資料 17】英語は好きか

これらのことから、児童の興味・関心に基づいた単元構想のもと、学習サイクルの構築による個別最適な学びの場の設定と他者との豊かな関わりを通して、自律的に学習する力を育み、児童が「通じ合い」の楽しさを経験したことが大きな原動力となり、主体的に学びに向かう児童の育成に資することができたとと言える。しかし、アンケートのどの問いにおいても、特定の層に否定的な回答が現れた。今後も、他者と関わる心地よさを実感できるような対話力の向上を目指し、児童が「伝えたい」と思えるような授業の在り方を継続して追究していきたい。



【資料 18】抽出児童 A の変容



【資料 19】抽出児童 B の変容